

對比宣傳情報

極秘

取 扱
注 意

本情報ハ部隊ニ於ケル
宣傳關係者服務上ノ參
考ニ供スルモノトス

南方軍報道部

(昭和十九年九月中旬號)

(第二十號)



1248

對比宣傳情報目次

第一 對比救恤金品供與

第二 敵僑對比宣傳動向

一 比島民待望の日迫る

ニ オスメニヤのメツセージ

第三 ケベツク會談を撓る敵僑宣傳情報

第四 一般參考情報

注 意

本情報ヲ宣傳上利用スル
場合ニ於テハ生文ノ權利
用スルコトヲ避クルモノ
トス
尙傍線ハ極秘扱トス

第一對比救恤金品供與

(一) 對比救恤金二百萬圓

在比島陸軍最高指揮官は現非常時に於ける比島人の中等に同情すべき事情にある者の生活困難を救ふべく救恤金として二百萬比を十三日宇都宮武官を通じてラウレル大統領宛贈呈した

比島現下の異状な經濟状態は眞に國家の爲献身奉公せんとする忠誠なる比島人の生活に相當の脅威を與へてゐるのみならず、その憂慮すべき影響は次代の比島を背負ふ純眞な幼少年者にまで及ぶと云ふ寒心すべき事象にあり、ために我が軍當局は終始盟邦民生の安定を期する意圖の下に夙に比島政府と協力し、百發の手段を盡して此の難局打回しに努めて來たのであるが、更に當面の事情は即刻救済の要切なるものあるに鑑みこゝに我が最高指揮官より右の如き贈與の措置が採られたものである

尙ほ此の救恤金贈與に對してラウレル大統領は我が仁政と文字通り

の同甘共苦の精神にいたく感激同日左記感謝の辭を發表した

左記

大日本軍より比島共和國に寄贈ありたる二百萬比は生活難に喘ぐ
民衆救済のためにのみ使用致し度存じ居り候 而して同資金の適
切有効なる活用を圖る爲余は關係を以て委員會を構成致し慶思惟仕
候 わが政府並に國民は日本政府特に在比日本軍の寛恕、仁慈を
數多く與へられたるものに有之更に大なる感謝を捧ぐるものに御
座候 比島共和國は現下の状態の重大性を十分認識仕居候 比島
周邊で展開されつゝある今次大戦は東亞十億の民族が獨立繁榮す
るか若くは西歐諸國の膝下に拜跪せねばならぬかを決定すべきも
のと思考仕候 而して東洋の盟主たる日本の勝敗は直ちに全東亞
民族の趨勢を決定すべきものなることをも承知仕居候 比島共和
國はたゞに同盟條約に基くのみならず運命の紐帶によつて日本を
衷心援助するものに御座候 吾人の最も遺憾とするは戦争か決定

的段階に入り然も我が領土内にも戦火の波及を見たる現在、我々が現在まで爲せる以外何事も實施し得ざること、御座候。まだ獨立間もなき比島は現在爲しつゝある戦争協力が決して満足すべきものに非ざること、承知致し居候。比島の進むべき方向は唯一つと思惟仕候。即ち現在の大戦が日本並に大東亞民族の勝利を以て終了するまで、最大限度の援助、協力を日本帝國政府に提供すること、に御座候。

(二) 救恤米三千俵

我が比島所在陸海軍ではマニラ及びキヤピテ兩市の食糧事情を緩和し比島國民を救済する爲十八日精米三千俵を右救済米として比島政府に贈與した。

此の三千俵の精米は苛烈な決戦下我が船泊が凡ゆる危険を冒して運んだ軍用米の一部で、この點に鑑みても、わが陸海軍の今回の措置は極めて意義あるものと謂はねばならぬ。

一方比島政府は曩に我が陸軍最高指揮官より二百万比の救済資金を
贈與され、更に今亦同様趣旨の下に現在最も貴重な主食糧を大量に
与られたのに對し益なる恩情として痛く感激してゐる

第二敵側對比宣傳動向

今旬に入るや敵の動向は逐次積極性を加へ、敵機動部隊によるバラ
オ諸島に對する侵襲モルツカ諸島モロタイ島に對する上陸又數次に
亘る對比高空襲等比島を繞る一般情勢は頗る緊迫を告げ、地方獨乙
防衛線に對する聯合軍の攻勢熾烈化に伴ふ獨乙防衛の消極化等客觀
的情勢に依り敵宣傳は比島解放の松愈々近れりと爲す宣傳に重點
化し、特に獨乙敗退の決定的印象を與へしむるに努むると共にチベ
ック會議の重要性を強調して聯合軍の總力による對日徹底攻撃の強
調、日本の必然的敗北等に對し積極的宣傳を展開しあり
今期にありては

(一) 急殆に頼せる獨乙防衛と、獨乙領土に對する聯合軍の大爆撃敢行を

示唆し獨乙の決定的收北近きありと強調

(二)獨乙國內に於ける親衛隊、秘密警察、國軍、民衆等の相剋勝利に對する絶望感、對政府不信、厭戰思想、叛亂行動等を指摘して獨乙國敗戦絶望感を強調す

(三)臨時議會に於て提案せられたる重要問題に關し重典解説を加へ、小磯首相は卒直に日本の餘機を容認し敗北を示唆しありと爲し、聯合軍の決定的勝利を強調す

(四)全島の對比空襲の決行と戦果を謳ひ、パラオ、モルツカ諸島に對する侵攻を大々に喧傳し比島奪回、解放の日は愈々迫れることを反覆強調す

(五)敵米の驕勢に乘じ比島解放を待望するオスマニヤのメツセージ等其の主なる動向である

一例

一 比島民待望の日迫る

（桑港十五日對比放送）

マツカーサー將軍は「聯合軍が比島南方三百哩の地點にあるハ
ルマヘラ島に上陸した」と報じてゐるが米國民は二ヶ年半に亘
り是等の島嶼の占領を待望してゐたのである、米國民は、軍隊
は勿論、工場に働いてゐる男女に至るまで總ての人々が比島に
對して非常なる責任を感じてゐるのである、米國民は比島解放
の爲心魂を盡して畫策するところがあつた。數百萬の米國民の
心はマツカーサー將軍麾下の航空部隊と共に「パナイ」「セブ」
及び「ネグロス」に飛び其の爆撃に参加したと云つても過言で
はない、此等の地方を攻撃した航空機はカリフォルニアより紐
育に到る各飛行機工場で製作されたものであり、翼、推進機、
及び特に重要な爆弾はシカゴ、羅府、シヤトル、桑港等大米
國の各都市より作られたものである。

米國民の作つた是等の爆弾は米空軍部隊に依つて日本軍の軍事

施設、飛行場、船舶並に其の占領地域に對し悉く投下せられるのである。

マニラに在る日軍管理下の新聞及びラジオ放送は米軍が總て比島に歸還し比島民を解放すると云ふことに對し頻りに逆意傳を放つて嘲笑してゐるが、眞實のところ日本軍は嘲笑する餘裕がないのである。今や彼等は米軍の上陸及び比島民の叛亂が起らざる遙か以前に既に彼等に不利なる現實を知り始めてゐるのである。

ヒットラーが歐洲に於て敗北の道を辿つてゐる時、日本軍部の首腦者達は日本が決定的敗北に直面して居る事實を悟つたのである。斯くして兩樞軸國の敗北は全世界に依り決定せられんとして居り、我が比島民も亦其の日の一日も早く來らんことを待望してゐるのであるが、時は漕たされ、總決算の日が來て是等の犯罪者達は必ず法の制裁を免れないのであらう。

ニホスメニヤのメツセージ（要旨）

（濠洲十一日對比放送）

、、、、、我々の勝利間近き時に方り遲疑逡巡して裏切行爲を爲すことは何人の眼にも明らかなる愚行であつて苦闘の末遂たる自由を放棄し敵の手先となるの屈辱的役割を勤むるに過ぎず、其の末路は蓋し惨めなものかあらう、バターン半島の戦場に於て比島人の發揮せる團結こそ比島獨立實現を可能ならしむるものであり比島人の正義を立證するものである。

バターンの英雄マツカーサー將軍麾下の米軍部隊に呼應、全力を振つて立ち上る秋が來た、今や勝利は保證され我等の比島解放は必然の姿になつた、敵日本軍の野獸部隊は最早之に逆ふことは出來ない、比島解放を完全ならしめる爲にけ強力を合軍が比島に上陸した時比島人は比島の爲各自に課せられた役割を十二分に果すことが肝要である。

予は何人と雖へ時來りなば予の呼聲に應じて起上るであらうことを信じて疑はぬ。

第三ケベツク會談を携る敵側宣傳情報

◎（倫敦十一日ロイター特電）

チャーチル首相とルーズベルト大統領會談の場所は華府郊外ポトマツクの見込みなり

◎（羅府十二日發プレスワイヤレス電）

ケベツク會談に出席せるルーズベルト大統領の隨員中主たる顔觸左の如し

大統領附參謀長ウイリヤム・リーイ、海軍大將エイド提督、待醫及び大統領夫人

◎（倫敦十一日發ロイター電）

チャーチル首相の隨員顔觸左の如し
各參謀長

陸海軍總長

科學顧問

レザリス卿

チャーチル卿

協同作戦部長(？)

ロバートレイコック少将

参謀次長(？)

イスチングス・イズメイ大將

待 撃

モラン卿

チャイナル首相夫人

◎(重慶十一日放送)

チャイナル「ルーズヴェルト會談の要點は太平洋防衛促進計畫なりと信ぜらる。

◎(香港十二日發AOP電)

ル大統領は軍首腦を帶同し十一日ケベックに到着しチャイナル首相と會談中なり「本會談が太平洋防衛局に重點を置くべきか」との質問に對しル大統領は「大いに然り」と答へたり、尙ル大統領及びチャイナル首相よりスターリン首相に本會談に列席する様招請せるに對し左の返信あり。

米大統領秘書アーリー之を披露せり、即ち「蘇軍が現在の如く長大

なる戦線に亘り奮闘し大攻勢を展開しあるとき余は短期間なりとも本國を離れ軍の指揮を忽にするを得ず、余が同志も總て出席不可能なりと意見一致せり」とアーリーは「ル大総領及びチャーチル首相がスターリン首相の列席を得ば誠に欣快なるも右返信は尤も至極にて任務遂行の爲缺席も當然なりとの意見を有する旨發表する様希望せり」と語り、ル夫人は「チャーチル夫人が同席中なるたゆ大総領に同伴せりと述べたり

◎（倫敦十二日發ロイター電）ケベツク

スターリンは、チャーチル、ルーズヴェルトの招請を却絶せるもケベツク官界は右は外交的に解難すべきに非ずと見做しつゝあり、因に右招請は數週間前に發せられたるものなり

第四 一般参考情報

(一) 経営ヘラルド・トリビューン誌の對日軍事評論

（羅府十四日發V P 電）

ニミッツ、マツカーサー、及びハルゼーの諸軍は、夫々異なる出發點より進攻を開始せるも、今や是等の諸軍は相持つて單一なる作戰体形を採るに至つた、又一方印度洋地域所在のマウントバツテン閣下の水陸兩部隊は之と伯仲せる兵力を以て西太平洋から進攻せんとする時機が到來した、吾國に西太平洋から進攻の氣圖が觀取される先づ比島を奪還した後日本本土を攻略せんとする慎重なるマツカーサー作戦と直ちに日本本土を強襲せんとする、ニミッツ作戦との間に一面軋駟が存在する様に考へられるが、斯る軋駟が兩者間に存在するとは信じ難い、ニミッツ提督も比島無由作戦は以前屢々口にしたり所であり、又マツカーサーにしてもニミッツが現在マリアナ群島の新基地に進出せしめたる集團的總母軍力の援助なしには如何とも仕難いであらう。

太平洋に於て使用し得る地上部隊が比較的少數にして而も輸送力に制限ある現在としては日本本土への決定的攻撃は殆ど望み得ない。

ニミッツ、マツカイサー爾將が協力し新に比島攻略作戦を開始する
のが論理的だと考へられる、是は將に開始されんとする間隙であり、又
米英聯合軍を歐洲より亞細亞へ移動せしむる計畫は全兵を最も効果
的に活動せしむるにある、恐らくこれはケベック會談に出席せる委
員の最大且第一の急務と考へられる。

(二)ニミッツ、對日作戰に關する演説

(桑港二十日AOP電)

ニミッツは太平洋よりシンカゴにて開催中の米地方國民會議へ向け次
の放送を行つた。

米軍のパラオ島奪取はカロリン群島の日本軍を孤立せしめ且トラツ
ク島所在の日本軍重要基地を無力化せしめるであらう。而して同島
の奪取は米軍をして日本本土、ニューギニア日本軍占領地域及び陸
領東印度關の連絡を遮断せしむる有利なる地位を獲得せしむるであ
らう、パラオ島陥落の隨には米軍の比島攻略に對する絶力なる障碍

は全く除去せられマツカサ大將の比島作戦を支持する標本とな
るであらう、日本軍に樂觀の余地なき如く米軍も樂觀をし過ぎる餘
裕はない、米軍の新なる西方進出の一步一步は補給の困難なる間隙
を盛大するものである、而も日本へ接近すればする程益々強靱にし
て複雑なる抵抗に遭遇するであらう、米軍は未だよく訓練された日
本の主力部隊と會戦するを得ないのである、日本海軍は依然として
米軍作戦に對する脅威である、歐戰に於て聯合軍が勝利を得るも、
それが直ちに日本を急速に完敗せしむるに充分なる兵力、物量を我
々に供給し得るとは考へられない。



南軍報比第二四號

「敵機」送付ニ關スル件通牒

昭和十九年十月三日

南方軍報 敵機部長

盟軍圍成第七三三部隊

兵團長 殿

前題ノ件左記ノ通り送付スルニ付然ル可ク利用相成難領候ス

通テ右ハ敵機機別圖ニシテ稍々大型トナシタルハ敵官、助教等ガ

右冊子ヲ直接携擧シテ兵教育ニ利用セシメガ爲ナルニ付右題旨

ニ依リ利用相成度爲念申添シ

左記

敵機

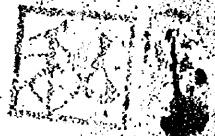
七百部



陸軍

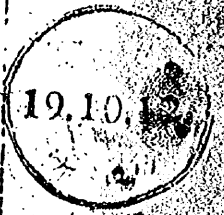
1264

部	課	記	任	官	課	長



昭和十一年十月八日

本報載ハ比島ニ於ケル食糧事情動向者照
 録上ノ記事ニ對スル爲明布スルモノトス



「マニラ」市ニ於ケル主要食糧品物價開示

「マニラ」市「パヨ」市場ニ於テ十月八日調査セル主要食糧價格左ノ如

左記

米 (赤味ノアルモノ)	一ガクタ	一三〇
米 (白)	〃	一三五
砂糖 (赤)	〃	一六二
バナナヤ (塊状ノ圓形赤砂糖)	一キロ	七〇
牛肉 (水牛)	〃	七五
豚肉	〃	一一三
トウモロコシ	一ガクタ	八〇
カモテ	一キロ	二〇

昭和十一年十月九日
 専方憲報道部

カセテ、カホイ	一	キロ	一八、
カサバ粉	一	個	六五、
卵 (アヒル)	一		六、
卵 (鴨)	一		七、
卵 (赤クダツタ國産イ卵)	一		七、五
ココナツツ (六)	一		三、一六、
カ (小)	一		三、五
替魚 (圓)	一	キロ	一、五〇、
コーヒ	一		七、六〇、
石 鱈 (アジア)	一	個	五、
カ (レインボウ)	一		七、
カ (ルソン)	一		三〇、
カ (エゴ)	一		五五、
南京豆	一	リットル	五、

モンゴ (小豆)

一 ガンタ 一六二比

モチ米

一 ガンタ 一六二比

鶏 (メス)

一 羽 一〇〇、一、二〇、

ス

五〇〇、〇〇

薪

一 束 二〇、一、一五、

註一、戦前、比島米一ガパンハ一カパンハ二五ガンダ、一ガンダハ二、

四キロ)六比ニシテ現在、米、一ガンダ一三五比、即チ一ガパン

三、三七五比即チ五百六〇倍ニシテ民衆ノ困苦ハ相當ナルモノア

リ、三人家族ノ一家ガ一日ニ興スル副食物費ハ最低五〇比ヲ下ラ

ザル状況ナリ

註二、一「マニラ」市「バコ」市場ハ「マニラ」市中ニ於テハ最も安價ナ

ル市場トシテ定評アリ他ノ市場ニ於テハ右表ヨリ尙若干高價ナル

モノト察セラル

終

印	電	任	主	官	謀	參	長	隊	部

極
秘

對
比
宣
傳
反
響
月
報
(七月)

昭
和
十
九
年
七
月
三
十
一
日
南
方
軍
總
道
部

大
19.10.12.
付

1268

對比宣傳反響

七月號目次

- 一、一般比島人ノ反響
- イ、大東亞戰爭關係
- ロ、歐洲戰爭關係
- ハ、政務關係
- ニ、治安關係
- ホ、宗教關係
- 二、第三國人ノ反響
- イ、大東亞戰爭關係
- 三、特異ナル反響
- イ、刊行物關係
- ロ、治安關係

一、一般比島人ノ反響

(イ) 大東亞戰爭關係

太平洋戰局ニ對スル反響

七月十五日

△我宣傳要旨

現下ノ奇烈ナル大東亞戰爭就中太平洋方面戰局ノ激化ニ伴ヒ、皇軍將兵ノ鬼神モ哭ク殉忠義烈ノ敢闘精神ニ依ル敵米ノ反抗企圖破潰並ニ戰局ノ局所ニ於ケル勝敗ニ係ル事ナク終極ニ於テソノ歸趨ヲ一舉ニ決スベキ我ガ作戦及ビソノ潛勢力ヲ反覆印象付ケ皇軍ニ對スル信倚心ヲ肝銘セシムルト共ニ凡ユル戰局ノ現象及ビ機微ヲ捕ヘテ皇軍絕對必勝態扶植ニ努メ戰爭完遂ノ爲ソ對日協力ヘシ促進ニ努ム

△反響

日本ハ太平洋ニ於テ大敗シツツアリトソ印象強シ
右ハ特ニ「ゲリラ」分子ノ敵側放送傍受ニ伴フ逆宣傳ニヨリ強メ

ラレツツアルモノノ如シ、
右理由トシテ彼等ハ次ノ如ク觀測シアルガ如シ

現在ノ戰場南洋群島ハ日本ノ内廓防禦線ニシテ就中「サイパン」
島ハ日本ノ最重要基地ナルニモ拘ラズ日本ハ米ノ攻襲ヲ撃退シ得
ズ、一度ビコノ線ガ米ノ手中ニ歸サンカ、日本ノ運命ハ既ニ定マ
ラント、而シテ「日本ハ充分ナル海軍力ヲ持タザルカ、或ハ日本
本土ヲ防衛センガ爲ニ保留シアルカノ何レカナラント」トノ點ガ論
點ノ中心トナリアリ

「サイパン」島守備隊玉碎ノ反響

△我宣傳要旨

大本營發表（七月十八日十七時）

「サイパン」島のわが部隊は七月七日早晩より全力を擧げて最
の攻撃を敢行、所在の敵を蹂躪し、その一部はタポーチヨ山附近
まで突進し、勇戦奮闘、敵に多大の損害を與へ十六日までに全員

壯烈なる戦死を遂げたるものと認め、同島の陸軍部隊指揮官は
陸軍中総務藤越次、海軍部隊指揮官は海軍少將辻村武久にして、
同方面の最高指揮官海軍中將南郷忠一をた同島において戦死せり
ニサイパン島の在留邦人は終始軍に協力し凡そ隠ひ得る者は敢然戦
闘に参加し概ね將兵と運命を共にせるものの如し

右大本營發表と同時に壯烈ナル神兵ノ大義ニ生キツツ在ル殉忠散
華ヲ誇ヘ、英靈ニ誓ツテ窮極ノ勝利獲得ニ邁進シツツアル一億國
民ノ旺盛ナル國魂ヲ宣揚シ、皇軍必勝感ヲ益々深カラシムル事ニ
努ム

△反響

一「サイパン」島ノ日本守備軍玉碎ノ報ハ即チ同島ガ米軍ノ手中ニ
歸シタル事ヲ意味スルモノト信ゼラル、先月來、日米兩軍必死ノ
攻防戦ニ空前ノ大血戦ヲ展開、日本軍ノ勇戦健闘ハ米軍ニ甚大ナ
ル損害ヲ與ヘタルモ遂ニ悉敵セズ、米軍ノ同島占領ヲ見タルモ

ノト推察サレ、而シテ米軍ノ次期作戦目標ハ小笠原諸島若シクハ
比島ト見ラレ、米軍ハ日本本土ニ至近ノ政略根據地獲得ヲ目的ト
シアルタメ同島政略ハ比島奪取ニ先立チ敢行セラルベク、次デ比
島ニ再來スルニ到ルハ今ヤ全ク必定ナルモノト斷シアリ
尙比島一般大衆ハ今ヤ古今未曾有ノ物價高ニ依ル生活苦難ノ結果
假令國土ガ焦土ト化シ、生命ヲ失フ危險アルモ一日モ早く米軍ノ
再來ヲ望ム者頗ル多シ、彼等ハ比島ガ修羅場ト化シ、ソノ場合民
衆ノ苦難ハ言語ニ絶スルモノアルヲ豫想スルモ唯利己的個人的立
場ノミヨリ刻下ノ生活難ヲ逃レ度シト思慮スル一途ニ右ノ如キ希
望的妄想ニ因ハレ居ルナリ、惟フニ現下ノ經濟的苦境ガ緩和輕減
サルレバ、カカル大衆ノ嗟嘆モ變ヲ恐ムルモノト想惟セラル。
要ニ一部比島民ノ間ニ於テハ米軍ガ甚大ナル損害ヲ蒙リタル發表
ヲ刺引評價スルコトナク、米軍ノ實情ト認メアリ、ソノ理由左ノ如
シ

(一) 戦鬪ニ於テハ一般ニ攻軍ノ犠牲ガ防禦軍ノ損害ヨリ大ナルハ
定則ナリ

(二) 「サイパン」島ハ太平洋制覇ノ最樞要點ニシテ日本軍ハ今日ア
ルヲ夙ニ豫測シ、萬全ノ用意ヲ怠ラザリシヲ以テ、其處へ上陸
作戦ヲ敢行セル米軍ノ惡戰苦鬪ハ容易ニ想像シ得ル所ナリ。

(三) 日本軍ハ「アッツ」「タラワ」「マキン」各島ノ場合ノ如ク泉
神モ哭カシムル奮闘力戰ヲ續ケ屈服セズ、遂ニ全員玉碎シタル
以上、上陸軍ノ損害モ蓋シ莫大ナルベシ

(四) 米軍ハ勝ニ乘ジテ北上、日本本土ヲ窺ハントスルモ從來ノ島傳
ヒ北上作戦ニ屢々蒙リタル損害ニ勝ル損害ヲ拂フヲ余儀ナクサ
ルルハ日本海軍ガ今猶無傷ニテ微動モセズ、米艦隊ヲ碎スル
力ヲ多分ニ有シ居ルニ依リ明瞭ニ察知シ得ル所ナリ、「マリア
ナ」水域ニ於ケル海戦ハ日本艦隊ニトリテハ小手調ベニ過ギザ
ルベシ

最近ノ逼迫セル情勢ヨリスル戦争ヘノ反響

四 更ニ本件ニ關スル斷片情報左ノ如シ

(一) 於ファイリツピン警察訓練所 訓練所生談

或ル者ハ「一、三週間後ニ、亦或ル者ハ二、三ヶ月後ニ米國爆撃機ガ「マニラ」市上空ニ飛來シ來ルトノ噂ヲナシツツアリ、之ガ理由ハ「サイパン」島ガ既ニ米國ノ占領スル所トナリ艦ヲ同島ヲ基地トセル米航空母艦ガ「マニラ」攻略ニ發足セントノ推察ニ依ルモノノ如シ

(二) 於「マニラ」市附近 車中乗客談

現在「マニラ」市内ニ多數ノ日本軍兵隊ノ氾濫シアルハ彼等兵隊ガ前線基地ヨリ漸次退去シ來レル兆候デアルト

(三) 於ハイアライ附近 比島政府僱人談(東條内閣總辭職直後)

今回ノ東條内閣ノ瓦解ハ現下政局ノ香シカラヌ事ヲ明白ニ物語

(ロ) 歐洲戰事關係

米陸軍長官「スチムソン」ノ「ノルマンディ」地區訪問ニ對スル

反響

△我報道要旨

「ストツクホルム特電十四日電」ロンドン來電によれば米陸軍長官「スチムソン」はイタリヤから英國に渡つてさらに北極線を観察するたぬ十三日ノルマンディの某地區に到着したと云はれる。

△反響

「ゴス」ノルマンディ地區訪問ノ眞ノ目的ハ獨、英ノ停戰交渉ヲナスニアリトノ流言專ラニシテ、特ニ「ゲリラ」分子ハ、獨乙ハ既ニ「ローマ」法王ヲ連ジ和平ヲ申出デタリト云ヒ「スチムソン」ハ選般「ローマ」ニアリテソノ實施細目ニ關シテ「ローマ」法王及ビ獨

乙代表下ノ間ニ討議ヲ行ヒタリトノ宣傳ヲ行ヒツ、アリ。

ニ右ノ如キ噂ニ鑑ミ獨乙ハ既ニ事實上敗北セリトノ噂更ニ流布サレツ

トアリ斯ル推測ハ流石ソ獨乙モ長期戦争ニヨリ相當ニ疲弊セルナラ
ントノ想像ガ容易ナルヲトモ及ビ獨乙ハ現在全ク敵ノ包圍攻撃下ニ
アリトノ印象ニ鑑ミテ行ハルモノナリ
三而シテ斯ル流言ハ益々今後共益威ヲ振フモノト推測セラル、之レハ
市民ガ戦争ヲ速カニ終熄シ、再ビ安易ナ生活ヲ享受サルガ如キ平常
時ノ到來ヲ予測セシムル風説ヲ常ニ歡迎セル傾向ニアル事實ニ照シ
瞭然タリ

(ハ) 政務關係

一 比唐獨立ニ關スル米國ノ立法ニ對スル反響

△我直傳要旨

六月三十日米國議會ヲ通過シ「ルーズヴェルト」大統領ノ署名ニヨ
リ成立セリト傳ヘラル比島獨立法案ナルモノニ關シテ、現下「ラウ
レル」大統領ノ下比島ガ今ヤ念願ノ獨立ヲ盟邦日本ニ依テ與ヘラレ、
眞ニ獨立國家トシテノ權威ト機能ヲ發揚シアル巖然タル事實ヲ指摘

シ比島ニ於ケル米國ノ主權ガ完全ニ喪失セル現在、米國ガ比島ノ獨立ヲ許與スルハ禁止ノ限リナル旨ヲ比島側ヲシテ痛烈ニ反駁セシメ更ニ右獨立法案ニ内包サルル比島ヲ足場トセル東洋征覇ノ野望ヲ暴露シ、着々戦争完遂ヘ向ヒ強化サレツツアル日比共同紐帶ニ對スル米ノ焦燥ヲ反覆指摘宣傳ス。

△獨立法案内容

順調ナル國家機能ガ回復スルニ於テハ可及的速カナル時期ニ比島ニ獨立ヲ許可ス

租米國ニ對シ陸、海軍基地ノ獲得權ヲ許與スル

△反響

比島人ノ大部分ハコノ種ノ「ニュース」ニ對シテハ著シク興味ヲ失ヒアリ、コノ「興味ノ冷却」ハ主トシテ次ノ理由ニ基クモノナルガ如シ

一、現在ノ米國ハ戰前ノ獨立ニ關スル公約ヲ果シ得ル立場ニアラザル

コトヲ比島民ハ自覺シアリ
 三比島ハ既ニ日本ニ依リテ獨立ヲ許容セラレアリ、又米國ガナシ得
 ル唯一ノモノハ精々コノ獨立ノ確認一位ノトコロナラント比島民
 ノ多クハ考ヘアリ
 三比島民ノ絶對多數ハ刻下焦眉ノ急ニ在ル食糧問題ニ痛心頻リナル
 モノアリ、昂騰一路ノ生活費ニ直面シテ如何ニ生キル可キヤ
 ニ没頭スルノミニテ他ニ余裕ナク斯ノ如キ机上ノ空論ニハ最早興
 味ナシ
 尙一部ノ比島人ハ米今次ノ立法ヲ以テ比島ノ民心ヲ買ハントスル
 政治的動機ヲ基クモノナルベシトノ疑念ヲ有ス、斯ルハ所詮「比
 島ノ再征服」ナルモノヲ前提トスルモノナリトシテ警戒シアリ、
 米國ノ意圖ハ比島ヲ再度戦火ノ巷ト化サントスルモノナリト解サ
 レルヲ故ニ一般ニ嫌惡サレテ勿論「ゲリラ」分子ハ之レヲ好
 ム用意ニ備カハ米國ハ此等ノ宗派ニ對シテ攻撃シテ米國ノ利益ヲ

個ノ材料トシ「ラウレル」政府及ビ日本軍ト比島民トノ離隔ニ拍
車ツカケツツアリ

東條内閣總辭職ニ對スル比島側ノ反響

△我宣傳要旨

情報局發表（七月廿日）

大戦勃發以來、政府は大本營と緊密一体の下、戦争遂行上あらゆる
努力を重ね來りしが、現下非常の決戦期に際しいよいよ人心を一新
し舉國戦争完遂に邁進するためには内閣の總辭職を行ひ、さらに強
力なる内閣に讓るを適當なりと認め東條内閣總理大臣は閣員との辭
表を取纏ゆ十八日午前十一時四十分拜謁を仰附けられたる上これを
閣下に捧呈せり

内閣總辭職に關しては情報局發表程度となし、次に組閣さるべき舉
國一致強力内閣の出現に重點を指向し、陸海兩軍重鎮に依る協力内
閣組織、その關係に現下皇國各分野の最高權威を網羅せる事實、我

戦争遂遂への不動の方針等、戦力結集の我決戦体制超強化を反響印象
付くる如く宣傳せられたるが、戦況進展に伴い、遂に我が國軍の強さを
△戻り、戦況の進展に伴い、遂に我が國軍の強さを

「一般に多太の關心ヲ示シ且ツ各種ノ風評ヲ試ミアリ、大部分ノ者
は、今同ノ總辭職ハ引續ク日本ノ敗戦ノ結果ナラントシ、戦争ハ日
本ノ最終ノ敗北ニ歸サントノ感ゼヲ強クセリ」
「彼等ハ「日本ノ敗戦」ノ證左トシテ米軍ノ「スリキートン」
「ボルバード」
「マイシセル」諸島「サイパン」島ノ喪失ヲ數ヘテ
六リ、又「ケリヲ」分子、反日分子ハ好機到レリトシ、盛ンニ日本
敗北ノ逆宣傳ヲ行ヒツツアルモノ如シ

「一部ニハ今同ノ總辭職ハ現在迄ノ日本ノ戦争完遂方針ヲ一轉シテ
「和平ノ方向」ヘ傾カントスル證左ニ非ザルヤト觀測シ居ル向キ
アリ、彼等ハ東條内閣ハ戦争完遂ノタメ全力ヲ傾注シ來レル内閣
ホレバ、ソノ辭職ハ當然「和平」ヘノ轉換ヲ意味スルトノ觀測シ

アリ、中ニハ後繼内閣ニヨリ和平ノ提唱ガ行ハレント觀ルモノアリ

三、然シテ日本ヲ理解スル少數ノ知日比人ハ、今回ノ總辭職ニヨリ日本ノ決戰体制ハ一段ト強化ヲ見ルニ至ラント觀測シアリ、彼等ハ日本ノ特徴トシテ至尊中心主義國家至上主義ヲ擧ゲ、内閣ノ更迭ニヨリ國家ノ方針ニ變更ヲ見ルナドハ有り得ザルコトナシ、今回ノ更迭ニ依リ當然決戰体制ハ更ニ強化サレントノ觀測ヲ下シアリ

後繼内閣ガ陸海軍ノ長老ヲ以テセル聯立内閣チアリ一應各方面ノ顔觸レガ網羅セラレアリ爲ニ「強力ナラン」トノ一般印象ヲ比島人ニ與ヘアリ、比島ノ一般ガ「聯立」乃至「聯袂」ナル表現ヨリ受クル觀念ハ「ヘーア・ホーズ、カツテイング」獨立法案ノ受諾ト拒否ノ兩論對立シ、拒否派タル「クソン」派對受諾派タル「オスメリヤ」口ハス」派「オスロツク」ノ政争ヲ反撥セル後「タイ

六 戦前ヨリ米國通信機關ヲ通シテ比島民ノ腦裡ニ植付ケテ居リタ
 ノノ如シニ開ケル説明ハ多クナル感動ヲ安堵スルニ成功セル
 テ胸襟ヲ開ケル説明ハ多クナル感動ヲ安堵スルニ成功セル
 未知ノ不安ヲ押へ得ズコノ點七月二十二日ノ村田大使ノ極
 シ得ズ依テ彼ノ退陣ハ一抹ノ心淋シサト後繼者ニ對スル
 比島人が東條前首相ニ個人的親愛ノ情ト知己感ヲ有シテ否
 リ考サルニ依テ聯立ナル文字ハ一應統合或ハ協調ヲ聯想セシメア
 シヨシナ形態ヲ取ル九三五年ノ事態ヲ想起セルモノト思
 幸福ト國家的統一ノメナル名分ノ下ニ兩派妥協シテコロリ
 デインクス・マックダウフ・イノ獨立法ニ於テ「比島國民ノ大局的

五
 観念ガ濃厚ナリシガ、今回ノ更迭ハ甚ダ簡明ナル理由ニ依リ、行
 ヒツト「乃至」ムツソリ「ニ」ヲ彷彿セシメ「獨裁者」ト
 ル日本ハ獨、伊ノ如キ全体主義的國家ニシテ東條首相ノ如キハ
 観念ガ濃厚ナリシガ、今回ノ更迭ハ甚ダ簡明ナル理由ニ依リ、行

ハレタル實情ニ鑑ミ、些カ啞然タル模様ナリ、ムツソリニ
辭職ヲ導火線トシタル「イタリ」政變ヲ聯想シテ、日本ノ國策
ノ一大轉換ヲ予想セル相當範圍ノ比島人ハ今更日本國體ヲ再認識
シツツアルガ如シ

七、東條首相ノ予備役編入ハ帝國ニ多士濟々ナリノ感ヲ如實ニ示セル
モノト受取ラレ在リ、今回ノ内閣更迭ニヨリ和平ヘノ轉換ヲ予想
シタル分子中、戰爭方針不動ヲ信ズル方向ニ移リツツアル者急増
シツツアル模様ナルモ、日本ノ軍事的失敗ヲ信ズル數ハ尙ホ壓倒
的ナリ。

八、國民及政府ノ見解ハ之レヲ「ラウレル」大統領ノ簡潔ナル聲明ノ
内ニモ見出スコトヲ得

比島人ハ激勵サル——比島人ハ能率ト効果ノ最高ヲ達成スルタ
メニ新内閣組織ニ現レタル決意ト智慧ニヨリ激勵サルルモノナ
リ、彼等ハ新内閣ノ内ニ現在決戰段階ニアアル大東亞戰爭ガ全東

洋人自自由威嚴ヲ保證スルヲ以テ其利益ヲ保シ
彼等ハ同僚關係内ニ其國争ヲ最良ノ勝利ニ導ク組織的ニ以テ決意
況ニ努力ヲ盡シ部小ナリ東亞人他諸國々々共ニ益其利益ヲ盡ク
内ニ少長其信念ヲ堅固ナラシムル爲メ、最高ノ激勵ト見ルモノナ
八日斐風通報ノ貝報ハ立マシメテ一々立シムル大勝論ノ簡潔ナル熱誠
論ナリ。

吾等ハ其熱誠ヲ以テ其國争ヲ最良ノ勝利ニ導ク組織的ニ以テ決意
況ニ努力ヲ盡シ部小ナリ東亞人他諸國々々共ニ益其利益ヲ盡ク
内ニ少長其信念ヲ堅固ナラシムル爲メ、最高ノ激勵ト見ルモノナ
八日斐風通報ノ貝報ハ立マシメテ一々立シムル大勝論ノ簡潔ナル熱誠
論ナリ。

一々立シムル大勝論ノ簡潔ナル熱誠論ナリ。
一々立シムル大勝論ノ簡潔ナル熱誠論ナリ。
一々立シムル大勝論ノ簡潔ナル熱誠論ナリ。

(二) 治安關係

最近二週間ノ「マニラ」ヲ中心トセル一般狀況

七月二日

△我宣傳要旨

治安ノ確立ハ、建設途上ニアル新比島ノ第一要義ニシテ、之ガ實現ハ現下比島ニ於ケル緊急的經濟問題ニ關聯セル民衆生活ヲ漸次緩和セシメ、民衆福祉ヘ多大ナル貢獻ヲナスベキヲ指摘強調シ、島内殘存匪團ノ抗戰ハ自國ニ對スル反逆以外何ヲ意義ナキヲ反覆指摘ス

△反響

比島人上流及中流知識人ヨリ成ル或一團ノ人々ノ會話ノ内容ヲ綜合スルニ概ネ左ノ如シ
集團強盜、追廻キ、殺傷、脅喝、テリテ騒動等ニ關スル噂ガ第一位ヲ占メ、次ニ精神錯亂的物價昂騰等ニ一米ハ處置ナキ缺乏ト騰

貴「ガ例外ナク論セラレ、第三位ニ比島政府上下ノ腐敗（官吏ノ
瀆職、不公平、半永久的怠業状態等）ニ對スル非難ガ眼々シク行
ハルヲ常トセリ

(一) 第一件ノ無警察状態ニ基ク「マニラ」市民ノ不安ハ極度ニシテ
市民ハ假令警察分署ノ前ニ居住スルモノト雖モ保護ハ期セラレ
難シト嘆ジ、緊急事態ヲ警察ニ急報セルモ大部分ノ場合其ノ成
果ヲ期得シ得ズ、又大部分ノ盜難事件ハ泣キ寝入りノ他ナキ状
態ナリ

例 六月下旬マニラ市エルミタ區フアグスン廣場エルミタ教
會ノ僧侶ハ夜九時教會ヲ襲ヘル強盜團ニ毆打サレ金品ヲ強奪
サレタリ、急ギ大聲ニテ助けヲ求メシモ道路一重ノ分署ヨリ
一名ノ救援モ來ラズ

(イ) 斯ル「コンスタブラー」ノ不忠實、怠慢、卑怯ハ不逞ノ徒
ヲシテ逐日暴威ヲ募ラシムル所以ナリ

(ロ) 不逞ノ徒ハ完全武装シアリ、地方良民ハ全ク防衛手段ナシ
(ハ) 「コンスタブラリー」ニシテ勤務ノ余暇ニ強盜追刺ヲ勤ク者
或ハ「コンスタブラリー」ヲ容ヒテ夜中押込ム者等頗ル多ク、
良民ハ全ク官憲ヲ信頼シ居ラズ

斯ル亂脈ヲ矯正シ、市中ノ治安ヲ恢復シ得ル唯一ノ手段ハ「日
本軍ニ依ル戒嚴令施行アルノミ」トノ要望頗ル強シ、彼等ハ獨
立國家トシテノ面子ト云フガ如キ名譽感ヲ問題トセズ、「信頼
シ得ル強力政治」ヲ只管ニ希求シアリ

(二) 米ノ關値ハ一俵七五〇比ヲ上廻ル現況ニシテ凡ユル兆候ハ一途
昂騰アルノミ、所々ニ飢餓行倒レヲ見ルニ到レリト

雨季ノ最盛期タル八月前後ニ到ラバ出廻リ量ノ本質的缺乏ト、
降雨出水ニヨル交通難送難ノ兩々相俟テテ急速ナル米價騰貴ヲ
招來シ十月ニ至ラバ一俵二、〇〇〇比ヲ上廻ラント予想サレル
爲之日本軍當局ノ政治的對策ハ最早喫緊ニシテ唯一ノ手段タラ

ント要請シ唐リ

(三) 官界ノ腐敗ハ要スルニ比島国民ヲ擧ゲテノ「日和見根性」ガ基

礎ヲナシ、職局ニ對スル信念ノ如キハ先ノ弊ニシタクモ存在セ

ズト見ラル

比島人ノ一般觀念ハ「トリビニー」紙ガ敵「チネミー」ナル

(一) 文字ヲ使用シタル場合、ソレガ「米英」ニテ意味スルトハ必ズシ

テ感ゼザル如シ。之レハ必ズシテ彼等ノ敵性ヲ表示スルモノニ

非ズシテソノ傍觀者的立場ヲ説明スルモノト解サル。依テ現下

ノ收拾ツカザル事態ニ日本軍ノ強權ガ發動サルルコトハ歡迎ス

ル所ニシテ些手不服ナシト考察シアリ

△最近月表ニ於ケル「マニラ」ヲ中心トセル治安狀況

(四) 現下「マニラ」市ヲ中心トシテ交ゼレアル一般民衆ノ談話内容ハ「マ

ニラ」市退去ヲ關スル件ガソノ殆ンドナリ、市民ハ聞キナク、

市ヨリ撤去ヲ要求サレ該命令ハ緊急ニ發令サレルヤモ計リ知レ

斯ノ一マニラ一ハ何時危險状態ニ陥ルヤ知ルベク、
 恐怖スベキ陸一海ノ激戦場ト化シ得ルハ、
 可能性ガ多分ニアリ、海岸一帯ノ地域ハ安全テハナク、
 同地域ハ軍用地帯トシテ日本軍ニ依リ指定サルベク觀測サレアリ
 (五) 更ニ「エルミタ」ヨリ「バコ」ニ到ル場所ハ日本軍ニ占領サレ
 「マニラ」南ハ先ズ「バシグ」川ヲ境界トシテ南北兩地帯ニ分
 割ノ上南部ハ武装軍隊ニ依リ占領、北部ハ一般民衆ノダメ留保
 サルモノト見ラレ、余裕アル間ニ北部地帯ハ移轉スルガ安全且
 好都合デアリ、同地帯ハ「サンタ・クルス」「サンパウロ」及
 「バシグ」川半岸ノ地帯ヨリ成立シアリ
 (六) 而モ最近新聞紙上ニ於テ一般住民ハ市内ヨリ退去ヲ命ゼラレ、
 現在政府並ニ日本軍ニ直接關係ナキ者ニテ市内ニ止マラントセ
 ルモノハ益テ陸軍ニ協力勸誘スベキヲ強要サルト擧げサレアリ
 トノコトナリ
 (註) 以上ハ勿クハ、新聞紙上ニ掲載サルベキ性

賃ノ私ノニ非ラズ、然レ其大部分ノ市民ハ同紙ノ發行部

數並ニ價額ノ高キタメ、最近市中ニ於ケル新聞ノ賣値ハ一

部三十錢或ハ四十錢ナリ、ニテ其購者ハ餘分ヲ從テ斯レ語

モ容易ニ借用サレ、廢テナリ、ニテ其購者ハ餘分ヲ從テ斯レ語

(ホ) 宗教關係

敵國人憲教ヲ收容スル反

七月十日

△我宣傳要旨

軍ハ比島國內ニ在住セル敵國人憲教ヲ收容スル反

シメアリタルモ最近一部敵國人憲教ハ此ノ皇軍ノ恩情ヲ逆用シ

難報謀略行爲ニ狂奔シ、只ニ直接軍人將士等ヲ多大ノ障礙及

シタルノミナラス、比島共和國政府ノ施政上ニモ種々ノ惡影響

及ボテ、到リタル爲、比島政府トテ、遺憾ノ上、今回ノ處置ヲ執リ

ニ到リタル事ヲ指稱シ、其ノ合法性ヲ強調ス

△反響

八月一齊ニ抑留セル敵國人僧侶尼僧約五百人ノ處置ニ關シテ俄ニ依リ市中ニハ相當廣範ナル流言蜚語予想サレシガ關係ヲ除ク一級ニハ大ナル反響ナシ之レガ反響ヲ蒐録スレバ

(一) 樞軸系外人側ノ觀測

今朝ノ敵國宗教人ノ抑留ハ當然ノ處置ニテ寧ロ時期遅レノ感ガアル、宗教ノ影ニ隠レテ敵側ガ行ツテ居タ宣傳ハ惡辣ナルモノアリ、吾々トシテハ比島政府ハ何ヲ爲シ得ヌトシテモ日本ガ何故放任シ置クカト日本ノ寛大サヲ實ハ齒痒ク思ツテ居タ位ダ

(二) 比島人實業家ノ觀測

日本ハ戰爭ノ苛烈化ニ伴ヒ比島ガ敵ノ謀略的根據地トナル事ヲ恐レテ宗教人トハ言ヘ敵國人タル僧侶、尼僧ヲ抑留スルニ至ツタモノデ次ニ來ルモノハ「マニラ」市其他比島重要都市ニ對スル戒嚴令ノ施行デアラウ

(三) 某洋食店ニテノ開書

七月十日全市ニ戒嚴令が施カレルコトニナツタ、米軍ノ來襲モ遠イコトヲハカイ、政府要人ヤ新聞ハ「比島ノ平和」ヲ頻リニ口ニシテ居ルガ、米國ニ好意ヲ寄セテ居タモノハ日本カラ抑留サレ、日本ニ好意ヲ示シテ居タ者ハ米國ガ來テ虐待サル、トシタラ如何シタヲヨイカ、當分ハ意志表示セヌノガ一番賢明ノ策ナリ

(四) 某比島人辯護士ノ談

敵國人宗教家ノ隠レタル言動ノ面白カラザルモノアルコトハ自分モ時々耳ニシテ居タ、併シ其レハ主ニ米國系ノ「プロテスタント」ノ僧侶達ヲ「カトリック」ノ僧侶ガ近日的言動アリトハ「ハ開イテ居ナイ」而シ彼等モ亦英米人ヲアル限リ機會ヲ捉ヘテ英米ニ有利ナ「デマ」ヲ飛バシタリ、此種軼働モ不潔ヲ備報スルカニ流布シタデアラウコトハ當然考ヘラレル所デ宗教人ダカラト言ツテ敵國人ヲ自由ニ外出サセテ居タコトハ日本政府ノ對敵態度ノ寛大サヲ示ス以外ノ何物デモナイ

二、第三國人ノ反響

(イ) 大東亞戰爭關係

在比印度人聞ニ於ケル「サイパン」島至碎ノ反響

七月二十二日

△我宣傳要旨

承前

△反響

「サイパン」島陥落ハ在比印度人間ニ商人階級間ニ動搖ヲ惹起シタリ
 愈々戰爭ガ比島領域ニ近ヅケリトノ緊迫感ヲ彼等ハ抱ケルモ、「サイ
 パン」島ニ於ケル壯烈無比ノ防戦ハ假令寸土ト雖モ夷敵ノ蹂躪ニ
 委ネズト死守セリ日本軍ノ決意ニ對スル印度人ノ信頼ヲ益々昂メツ
 ツアリ、之レガ反響管次ヲ示スリ

一 富裕商人階級

此ノ階級ニ關スル者ハソノ階級ニ就中懸念ヲ抱キ既ニ安全ナル場

所へ之ヲ貯藏シ始メタリ一ハ米粟ニシテ生命財産ノ保護ニ最モ安全ナル地トシテ茲ニ移轉ヲ目論ミツツアル者モアリ、此ノ態度ニ依リテ彼等ノ最大關心事ヲ生命財産ニ在リト推斷スルモ誤リナラズ

三 勤勞者階級ニバシテキレズ族ニシテハ其ノ利益ヲ保護スルハ其ノ義務ナリ、ガカル身分ナルヲ以テ今茲戰爭ニ於テモ別ニ産ヲ成サズ守ルベキ財モ大シテ有セズ、故ニ彼等ニ取リテ一サニ一島ノ陷落ハ單ニ交戰國ノ一方ガ敗北ヲ喫シタリトノ戰爭中ノ一事件トシテ看過シアリ

三 敗戰論派

敗戰論者ハ米軍再來ノ實現ニ對スル恐怖感ヲ愈々深メタリ、各地ノ戰場特ニ太平洋ニ於ケル最近ノ戰局ハ米軍再來ノ恐怖ノ幻影ニ取憑カレタル敗戰論者ヲ多數現出セシメタリ

四 之ガタメ印度人聯盟比島支部ノ活動ハ無關心トサレ、消極的トナ

三、特異ナル反響
リ、聯盟管理委員會等ハソノ活動ヲ中止スルニ至レリ

(イ) 刊行物關係

「トリビューン」紙投書欄ノ示セル民意反響

七月十四日

△反響

六月十三日乃至七月十三日ノ一ヶ月間ニ英字新聞「トリビューン」紙、パブリック、パルス欄ニ掲載セラレタル一般投書九十六編ニ就キテ分類調査セル結果左ノ如シ

一 生活難特ニ食糧問題ニ關スル嘆キ三十四件

内譯「イ」十六件（食糧問題）「ロ」十三件（等給増額ノ要請）

ハ 五件（暴利取締要請）

ニ 比島政府官吏員ニ關スル訴へ十六件

内譯「イ」十三件（腐敗、不正ヲ非難セルモノ）「ロ」三件（美譽ヲ

推稱セルモノ

其ノ他四十六件

右ノ統計ニ徴スルニ比島人刻下ノ筆頭關心事ハ生活難ニシテ次
ハ比島官公吏ノ腐敗ニ對スル痛憤ナリ

△十六件ニ及ブ食糧主トシテ米ノ問題ハ昨今一カバン、八五〇―八
八〇比ノ闇値ヲ稱フル今日ニ於テハ一層緊迫セル問題ニシテ、千
八百萬比島民ヨリ一種ノ英雄視サレ居タル食糧局總裁「マヌエル
ロハス」モ今ハ全ク人氣ヲ失フニ至レリ、コレ「日本軍ノ力ニ非
ザレバ食糧問題ハ解決セラレズ」トノ結論ニ到達セル理由ナラン
カ

△俸給引上ケ乃至ハ特別物價手當ノ考案要請ニ見ラレル特ニ下級官公
吏、警官ノ腐敗ハ生活難ニ基ク所甚大ナリトノ事實ハ一考ニ値ヒ
スベシ、比較的清廉ヲ保チタル官公吏ハ所持品ノ賣リ喰ヒニテ生
活ヲ緊ギ居ル現狀ナリ

△暴利、買溜、賣り惜ミハ極カニシテ之レハ斯ル要難ガ何等ノ効果
ヲモ來サザルコトヲ知悉セルタメナランカ、然レドモ取締ノ要難
ハ切實ナルモノアリ

△腐敗官吏ヲ彈劾セルモノ中三件ハ特ニ警察官ヲ名指セルモノニシテ
腐敗官吏ハ良民ノ迷惑ナレバ誠首ズ可シト力説シタルモノ一般ノ
腐ハ「ラウレル」大統領ノ當初ノ聲明ニモ拘ラズ「小者」ノミガ
檢舉セラレタルノミニテ「吞舟ノ魚」ハ逸シ居ル手留サヲ指摘シ
タルモノ多ク、市中ノ輿論モ常ニ龍頭蛇尾ニ終ル政府ノ實行力缺
除ニ愛想ヲ盡カシ居レリ

(イ) 治安關係

マニラ灣○○炎上事件ニ關スル反響

七月十七日

△反響

十六日早朝「マニラ」海峽途中日本油槽船一隻爆炎炎上事件ハ

市井ノ謠言捏造者ニ好材料ヲ提供セリ

當日ハ日曜ナリシモ午前七時前後ハ日曜朝ノ「ミサ」ノ時間ナリシタノ比較的多クノ市民ガ所在ノ教會ニ參詣シアリ、海岸寄りノ教會ニテハ響音ヲ耳ニスルヤ忽チ爆響ヲ聯想シテ教會内ハ混亂ト非鳴ノ巷ト化セリト、「エルミータ、マラテ」ノ教會ニアリテハ「ミサ」モ打切りトナリ參詣者ノ一部ハ海岸ヘ走り、大部分ハ自宅ニ逃ゲ歸リタリト、コノ「恐慌」振りハ路上ニオイテモ散見セラレタリ

本件ハ流言蜚語愛好者ニトリテハ好個ノ資料ナレバ平常日曜ハ珈琲店ハ一般ニ閑靜ナルニモ拘ラズ終日相當賑ヒタリ

爆發ハ眼前ニテ發生セルモノニシテ一切ガ明瞭ナルニモ拘ハラズ數々ノ笑止千萬且ツ非論理的「デマ」ガ生産セラレタリ

一爆發、炎上セル船ハ二隻乃至八隻トシテ區々ニシテ軍艦ナリトノ説モ行ハル

ニ米軍ノ空襲説ガ一般的ナリ、但シ米機ヲ見タリトナクモイハ少半由
ニ潜水艦ニヨル襲撃説

四米軍ガ「V一號」ヲ使用シタリトナス説

ニ大爆發ニヨリ若干ノ書籍、書類ガ中空ニ吹き上ゲラレ「バコ」
方面ニ落下セルモクアリタルラシク、コレニ伴ヒテ米機ハ「リ
」フレット」ヲ撒布シタリトノ噂アリ

コレヲ要スルニ如何ニ筋道ガ非論理的ナリトモ愚昧ナル大衆ニ
受入レラレタル所ニ徴スレバ一般市民ハ斯ル事態ヲ歓迎スル肚
アルコトヲ立證スルモノト解シ得ベキナリ